R.シューマン／交響曲第２番 ハ長調 作品61

妻クララがシューマンに与えた音楽的影響はとても大きなものです。結婚前の1839年にシューマンは「声楽曲は器楽曲より程度が低い。私は声楽曲を偉大な芸術とは認めがたい」と述べ、ほとんどピアノ曲ばかり作曲しました。がしかし翌年、クララとの結婚が近づくと、一転して続々と歌曲を手がけるようになります。二つの『リーダークライス』『ミルテの花』『女の愛と生涯』『詩人の恋』などの名作を含む120曲が書かれることになったのです。

また、これまで構想こそすれ書くことのなかった交響曲も、結婚の翌年には第１番とのちに第４番となるニ短調が、1846年には第２番が夫妻の住むライプチッヒで書かれ、メンデルスゾーンの指揮で初演されました。シューマンはクララとの結婚を機に、ピアノ曲の作曲家から歌曲と交響曲の作曲家へと転身したと私は考えます。

曲は４つの楽章からできています。**第1楽章**で「十分に音を響かせて」指定のある4/6拍子のイントロは、この交響曲の中でしばしば現れるモチーフがトランペットで印象的に始まります。続く3/4拍子は「速く、しかしあまり速すぎないように」というテンポ指定で進み、最後のクライマックスでは再び冒頭のトランペットのモチーフが現れ楽章を締めくくります。**第２楽章**は珍しい2/4拍子のスケルツォです。テンポをさらに上げたコーダではここでもトランペットのモチーフが現れます。冒頭のヴァイオリンの奏でる旋律に魅了される**第３楽章**の後、一転爆発するかのように始まる**第４楽章**は高貴な華やかさの旋律から讃歌を思わせるものまで溢れ出る主題のコラージュです。

『29歳のころのシューマン』クリーフーバー作

シューマンの管弦楽法はくすぶった響きを持つ独自性あるもので、華やかさに欠ける、バランスが取りづらいと、しばしば言われ、ゆえにこれまで多くの名指揮者たちがそのスコアに手を加えた演奏を残しています。今回は聞きやすさとシューマンに対する尊敬の念を併せ持った指揮者大勝氏の改訂版で演奏されます。

（かんばらひとし）